

『家族会議と魔法の書』

日根野 通

4,977 文字

あらすじ

昭和の匂いを残す古い家に一人の女がやってくる。かつてこの家で育った男の妻となり、新居に選んだこの家を掃除すべく、女はやってきた。その様子を伺い、彼女を見定める「家族」達。女は祖母から受け継いだ本を使って、掃除を始める。「掃除は儀式である」その言葉の意味を考え、感じとりながら、女はキレイで家を蘇らせ、「家族」に認められていく。

「ようやくこの日が来たな、間に合ってよかった。」
「そうね、ついに真ちゃんが帰ってくるのね。何年ぶりかしら。」
「しかもお嫁さん連れてくるってさ！」
「どんな人だろうね。」
茶の間の掛け時計がボーン、ボーンと午後2時を告げる。
「おっとそろそろ来る時間じゃないか？」
「先にお嫁さんが来るんだよね、掃除しに。」
「そうよ、この家の嫁に相応しいか、確認するチャンスよ。」
「もう、そういうのやめなよ。真ちゃんが選んだ人だよ、良い娘に決まってるじゃん。」
ガチャガチャと玄関の鍵を開ける音がある。
「来た！みんな静かに！隠れるぞ！」

廊下の奥は薄暗い。もう十年以上も使われていない家。しかし最近まで手入れをして
くれていた人がいたらしく、それほど荒れ果てた印象はない。

古風な家だな、と思う。玄関は擦りガラスの引き戸のドアで、平屋。サザエさんの家を
ひと回り小さくした感じ。

本当ならば、新居は郊外のマンションになるはずだった。というか私はその予定だっ
た。しかしプロポーズの後、彼が言ったのは「昔住んでいた家にもう一度住みたい」だ
った。まあお互い会社に通えない距離ではないし、小さくとも一戸建てだし、私も別に
住む所に拘りがある訳でもないのだから、快諾し本日に至る。

ある程度は手入れをされているものの、引っ越し前には掃除が必要だ。薄暗い廊下
に向かってとりあえず声を掛けてみる。

「お邪魔します。」

返事があるはずはない。玄関を上がってすぐのところにお手洗い。廊下を挟んで子
供部屋かな、一部屋あってその横にもう一部屋。そのまま進むと左手にお風呂、突き
当りが台所でそのまま茶の間に行かれる。

茶の間に足を踏み入れると、何だか変な感じがした。気配を感じるというか、正確に
は気配の残り香のようなものを感じた。

鍵を開けたのは自分だ、それより先に誰かがいるはずはない。

急に不安に襲われて、急いで雨戸を開ける。柔らかい光が古びた畳と部屋を照ら
す。

何もいない。天井の角に大きな蜘蛛の巣があり、蜘蛛は静かにそこに入る。ただそれ
だけだ。再度部屋を見回してみる。

これまた古風な柱時計。焦げ茶色の箆笥。天井近くには大きめの神棚。これでもか
つてくらい昭和のエッセンスが詰め込まれた部屋だ。きっと私たちの親の世代にとって
の当たり前前の環境なのだろう。何だか畳に寝転がって、そのまま眠りにつきたくなる誘

惑に襲われる。

おっと、ノスタルジックな感傷に浸っている場合ではない。彼が用事を六時に終えるとして、ここに着くのがだいたい七時。その頃までに掃除を終えてしまいたい。

「よし、やるぞ！」

背負ってきたバックを開けて私は、腕を捲る。

「どう思う？」

「う〜ん。見た目は普通の子ね。」

「玄関で挨拶ができた所に加点。」

「でもそれって常識じゃない。むしろ黙って入ってきたら減点でしょう。」

「そもそも、引っ越し前の掃除を一人で引き受けるっていう気持ちが良いじゃない。」

「そうだよ、そもそも真ちゃんはお嫁さん一人に掃除を任せて何やってるのさ。」

「色々あるんだろ。男は外に出れば7人の敵がいると言うからな。」

「いつの時代の話よ。」

「しかし、後もう数年早く戻って来てくれれば、奴らも去らずに済んだんじゃがのう。」

「それは言わない約束よ。私たちは残る事が出来た、それで良しとしましょう。」

「まだ分からんよ。彼女が真一に愛想をつかして行ってしまったら・・・。」

「でも真ちゃんはここに残るでしょう。昔みたいに犬でも飼って穏やかに暮らせばいいのよ。」

「真一人では見る見る内に廃墟になりそうだがのう。」

さて、まずは家中の窓という窓を全部開けた。なかなか風通しの良い家だ。

遠くに夏の足音を感じる今の季節は風が心地よい。新緑の若いエネルギーを乗せてそよぐ風が家の中を吹き抜けて、止まっていた時間を動かして行く。

人が住まなくなった家はみるみる内に廃れて行く、そう教えてくれたのは祖母だった。

祖母はとても家事に優れた人で、時々よそに頼まれて掃除に行ったりもしていたそう。祖母は亡くなる前に、私に一冊の本を託した。それは本というよりは祖母の書いた指南本のようなもの。私は掃除をする時はまずこの本を開く。

この本の一ページ目にはこう書いてある。

-掃除は儀式である-

確かにね。新しい家に入る時は掃除をするし、大みそかだつて新しい年を気持ちよく過ごすために大掃除をする。それは単に物理的な問題ではなく、掃除という行為をすることによって、心を新たにすると事なのかもしれない。儀式というにはいささが仰々しい気はするけれども。

さてさて、まずはどこから取り掛かるか。

階段下にだいたいの掃除用具が入っていることは聞いていたので、必要なものを取り出す。そしてかばんの中に入れていた瓶を持って玄関へ向かう。

瓶から乾燥させた茶殻を取り出して撒く。

私の掃除方法は全て祖母仕込みだ。直接習ったこともあるし、指南書から学んだこともある。その教えではなるべく科学薬品などは使わず、家にあるものを使う。もちろん普段の生活の中の掃除ではそんなに手間のかかることはやらないけど、大掃除などのここぞという掃除には祖母の教えに従う。私自身祖母の「掃除は儀式」という思想を遺伝子レベルで継いでいるのかもしれない。

茶殻と一緒に埃を掃き清める。ほのかに舞う緑茶の香りが爽やかな気分させてくれる。

大掃除の始まりにはちょうどいいと思い、手には雑巾を持ち変え玄関のお清めを進めた。

「へえ、なかなかやるね。手際がいい。」

「次は風呂場だ。お、ジャガイモの皮じゃないか！鏡を磨くのか！」

「これなら、台所のシンクなんかもキレイにしてくれそうだね。」

「お風呂とトイレ掃除にはお米のとぎ汁を使っている。見た目は若いけど昔の人みたいだな。」

「なんだか懐かしいのお。タカさんがよくこうやって掃除をしてくれてたのう。」

「そうだねえ、全てが活き活きしていたあの頃みたいだねえ。」

「そういや、タカさんも美人ではなかったけど、しっかり者で家の事を良くやってくれていたよね。」

「そうそう。一所懸命何かをキレイにしている人って、その人自体もキレイに見えてくるよね。」

「ああ、トイレ掃除をちゃんとやると、美人の子供が生まれるっていう話もあるもんね。」

こうして何かをキレイにする作業はなかなか楽しい。私は掃除という行為が結構好きだ。

一つの目標に向かって黙々と作業をする。そしてその成果が目に見える。達成感もあるし、気持ちがさっぱりするのも魅力だと思う。専門的なことは良く分からないけど、体を動かす事がストレス解消になっているのかもしれない。部屋をキレイにしてしかめっ面になる人はそうそういない。どちらかと言えば清々しい表情になるんだと思う。掃除の魔法ってところか。

磨いたお風呂場の鏡を見してみる。これと言って特徴のない、普通の顔。不細工ではないと思うけれど、美人でも可愛くもない。でも、それでいい。この鏡は私だけを映すわけではないのだ。これからここに住む彼と、未来には自分の子供たちもこの鏡を使う。

彼ら笑顔が映れば、それでいい。

集中し過ぎて時間の感覚がなくなっていた。外の色は橙を通り越し、藍色がその大半を占めている。電気をつけようとしたその時だった。スマートフォンが静寂を切り裂くように鳴り響いた。

「はい。」

電話の主は彼だ。もうすぐ着くと言う。時計を見ると午後六時半。

「私は何でもいいよ。駅前にスーパーがあったじゃない。そこのお弁当でいいんじゃない？うん、飲み物は緑茶でお願いね。はいはい、じゃあまた後でね。」

電話を切った瞬間、なんだかざわつくような感覚に陥った。やっぱりこの家なにかがいるんじゃないか……。

私はそそくさと電気をつけ、彼が到着するまで手持無沙汰に待つしかなくなった。電気は通っているけど、まだテレビがない。スマートフォンをいじろうと手を伸ばすが、一度動きを止めてしまうと、どっと疲れがでて寝転びたくなった。

寝転んだ私は、これまた古風な天井にぶら下がった電灯をぼんやりと眺める。揺れるそれは、催眠術を掛けるかのように私を眠りへと誘おうとする。

その時だった。落ちてくる瞼に移りこんだのは六つの人影。私を覗き込むように、電灯の光を背にして黒い形が視界に移りこんでくる。

「ひっ！」

私が飛び起きると同時に、玄関から物音がする。

「彩ちゃん、着いたよ。」

私は玄関に向かって駆けた。

「どうしたの？すごい顔しているよ。」

私の気もしらないで、いつも通りの緊張感のないのんびりとした口調で彼は言う。しかし何と伝えればいいのか。この家には何かがいる、とか幽霊を見たとか……。

「うわ、懐かしいな。昔のまんまだ。」

何から話せばいいのか分からずに固まっている私を尻目に、彼は懐かしそうに辺りを見回す。そして彼は何かに気がついたかの様に、顔をほころばせ、私に向き直った。

「彩ちゃん、ありがとうございます。この家生き返っている。」

「え？」

彼は満足げな表情で、靴を脱ぎ、茶の間へと向かった。

そして茶の間に足を踏み入れた瞬間、何かを思いだしたように、急に頭を下げた。

「ただいま！お久しぶりです。また一緒に暮らせて嬉しいです。改めてよろしく願います。」

一体どうした、何を言っているのかしら、この人は。前々から掴みどころのない人だとは思っていたけど。

「皆さん、この人が僕のお嫁さんの彩ちゃんです。末永くよろしく願い致します。」

目には見えない誰かに突然紹介をされた私は、条件反射で頭を下げる。
私に笑顔を向けて、彼は台所からコップを持ってきて、それにお酒を入れて、神棚に置いた。

「さあ、ご飯食べようか。」

なんというマイペース。一連の流れに関して私に一切の説明はない。自分から聞くのも何だから、彼が話すまで待ってみよう。とりあえず彼はあの黒い影の正体を知っていて、それはあまり悪いものではなさそうだとということが分かったのだし。

「この家にはね、神様たちがいるんだよ。」

彼は続ける。

「ばあちゃんが教えてくれたんだ、家には神様がいて、人が住まなくなると神様も消えてしまうって。だから戻ってきたんだ。」

この言葉で全てが腑に落ちた気がした。あの視線も気配も、黒い影たちも。

「じゃあ、私は神様たちの試験を受けていた訳だ、この家族になるのに相応しいか否かの。」

「そんな仰々しいもんじゃないよ、きっと。みんな野次馬感覚でみていたんじゃない？でもきっと驚いている。そして感謝している、家が生き返ったから。きっと他の神様たちも帰ってくるよ。」

私は何とも言えなかったが、なんだか嬉しかった。家が生き返る。なんだか魔法使いになったような気がする。

「そうかな、まあ私には魔法の書があるからね。」

「魔法の書？」

私は祖母から受け継いだ指南書を彼に差し出す。

「私のおばあさんが書いた本なの。掃除は儀式である、なかなかの名言だよ。その意味が真ちゃんの言葉で分かった気がする。私たちのおばあさんたちの時代は色々なものを大事にしていたじゃない。家を傷つけないように、そして綺麗に。何より他の誰かの為に心をこめて掃除をする。そうすると自分の心も綺麗になるんだよ、きっと。家だけでなく自分の中に神様が来てくれるような感じ。」

私は対して美人ではない。でも今何だか良い表情をしているんじゃないか、って思う。きっと掃除の魔法がかかっているんだ。

部屋の中を見回してみる、最初とは違って、自信満々で誇らしげに。

私はどきっと、畳に寝転ぶ。彼も続いて寝転ぶ。

「良い子が来てくれてよかったな。」

「そうね、良く見たら笑顔のかわいらしい子だものね。」

「そうそう、一所懸命な所がいいよね、性格もよさそうだし、しっかり者だし、何より真ちゃんとお似合いだよ。」

「お、そろそろ皆が返ってくるの、足音が聞こえるわい。」

「玄関まで迎えに行こうよ。」

私も彼も同じ瞬間に起きあがった。

玄関が開いたような気がした。何かが家の中に入ってきたような気がした。風が草の上を滑って駆けるように、廊下を走り、何かが私たちがいる部屋に押し寄せて来た。

けれど恐れる事はない。私が呼び寄せたのだから。キレイが神さまを呼びもどしたのだから。

姿は見えない。だけど何かがいる。

私と彼は立ちあがり、それらに向き直って笑った。自分では分からないけれど、きっとキレイな笑顔で。

「おかえりなさい。」